

第1回 教育懇話会 委員意見要旨

(平成29年度教育委員会活動の自己点検・評価について)

平成30年8月28日

意見者	意見概要
阿部委員	<p>・親も祖父母も、子どもをとっても大切に思っている。一つの家庭の願いは、町全体の願いにもつながっていると思っており、子どもたちの心と体の成長、学力の向上は、大切な出発点だと思っている。その家族の願いの具現化は、家族だけではできない。子どもが成長して高学年や中学生になると、親が子どもに関心を持って、宿題や自主学習を見てやりたいと思っても教えることまではできない、やはり学習に関しては学校の先生に頼らざるを得ないという家庭もある。学校の先生方にはその現状をあらためてご理解いただき、学習に力を注いでいただきたいと思っている。学校の先生方が、授業づくりや学級づくりなどの校務に専念できるようにするためには、家庭の教育や生活に関する課題があるように思う。家庭でも、基本的な生活習慣の確立、家庭学習の習慣づけなど、もっとやれることがあるのではないかと捉えている。親も子どもも共に学び続けることが大切で、私たちの放課後子ども教室でも、親が学校のPTA研修会や学習参観、懇談会などに参加しやすいように、土日も開くようにしている。これからの時代は、親世代の学習機会の確立が重要で、それが生涯学習の充実にもつながっていくと考えている。</p> <p>P11【8 変化に対応する実践的な力の育成】関係</p> <p>「英検3級以上程度の英語力のある中学生の割合」が43%と示されているが、それは中1から中3までのすべての生徒を対象としているのか。</p> <p>【回答】 (竹田義務教育課長) 中学校3年生を対象としている。</p> <p>「親世代の教育の充実が大切だ」という意見について事務局の考えは。</p> <p>【回答】 (竹田義務教育課長) 昨年度、「子どもの生活習慣に関する指針」を策定し、「子育て5か条」も、小さいパンフレットの形で作成し、それを活用した研修を今年度実施している。</p>
池田委員	<p>P23【19 生涯スポーツの推進、20 競技スポーツの推進】関係</p> <p>・スポーツ界でも様々な変化が生じている。その1つが、アスリートに対するコンプライアンス教育。「アスリートとはどうあるべきか」やSNS等での情報発信に対するリテラシー教育が重要になってきている。また、指導者についても、適性や評価を見直し、どういう人材を育成すべきかを考え直す時期にきている。学校における部活動の顧問(教員)は教育者と指導者</p>

(コーチ)として2つのスキルを求められる。競技力の高さ=人間力の高さではない。今後、スポーツを通して人間力を向上させることが必要とされる。競技力向上を主眼において指導することも分かるが、アスリートの権利等も視点においた教育が必要になってくると思われる。

- ・スポーツ人口が減少しているのは寂しい。スポーツをする場合、所属団体(スポーツ少年団やスポーツクラブ等)で人の取り合いも見受けられるが、団体の垣根を越えた視点でスポーツ人口を増やすことが必要である。
- ・スポーツ選手は結果が全てであるが、数字だけでは評価しきれない部分もある。指導者のスキルの向上やアスリート自身への教育などの視点も踏まえ競技スポーツを推進してもらいたい。山形で活躍する若い選手が中央等で活躍した後、山形に戻りたいと思うような教育が必要である。
- ・障がい者スポーツやパラリンピックでの選手の活躍が目立つ。教育分野においても障がいのあるアスリートが活躍できるような機会を作り裾野を広げることで、山形県のスポーツ界はもっと良くなる。また、新たなeスポーツ等に対する考え方も整理しておく必要が今後でてくると思われる。

【6 健やかな体の育成】関係

「がん教育協議会」とはどういうものか。健康管理については自己管理を行うアスリートも与えられる部分があると感じた。

【回答】

(田村保健・食育主幹)

H28年から実施しているもの。県内4地区でモデル校を配置し、保健の授業や外部講師を招いてがん教育を行っている。

落合委員

P7 【4 教育の原点である家庭教育、幼児教育の推進】関係

- ・親に対する教育が重要と考える。親としてまっさらな、乳幼児健診等のタイミングを捉えたと、素直に聞いてもらえ効果が高いのではないか。(自治体で行うこととは思うが)読書等家庭教育の重要性は早い時期に(教育を)行った方がよい。
- ・スポーツに親しむことは大事であるが、スポーツ少年団の活動が低年齢化、過熱化していると感じる。その結果、就寝時間が遅くなる、宿題ができない等の弊害も聞こえる。学校よりもスポ少活動を優先した結果だろうが、優先順位をどこにおくかが大事。
- ・小学校の活動全般において余裕が無いと感じる。学校行事が過密で先生も子どもも大変。行事をこなすので精一杯という感じ。また、少子化により学級数が1学級に減少されたが、副担任がついても40名近い人数では、先生の負担とともに教育力が落ちないか心配。余裕をもって子ども達の教育にあたる事が出来る環境を作ってほしい。

P11 【8 変化に対応する実践的な力の育成】関係

鶴岡市の「小中高大連携プログラム事業」とはどのようなものか。

<p>【回答】</p> <p>【回答】</p>	<p>(澁江教育次長)</p> <p>2020年の学習指導要領改訂を踏まえ、主に小学校の英語力強化を念頭に、中学校区をベースとしてモデル校を設置している。それぞれの学校種ごとに授業改善や、ふるさとの魅力を英語で発信することなどを行っており、その成果や課題について学校間で共有して連携を図っている事業である。</p> <p>P13 【9 社会的自立に向けた勤労観・職業観の育成】関係</p> <p>起業家精神の基盤となるマインドづくりとはどのようなものか。</p> <p>(竹田義務教育課長)</p> <p>高い志や意欲を持つ児童を育成するために、地域の企業等と連携した職場体験や小学校へ経営者を招いて講話してもらうこと等を積極的に行っている。</p>
<p>黒木委員</p>	<p>P14 【10 特別支援教育の充実】関係</p> <p>・特別支援教育について数値目標が達成されている。これまでの努力に敬意を表する。</p> <p>①特別支援学校教諭免許状保有率(85.5%)</p> <p>文科省の32年度末の目標値が100%。新規採用教員にあつては免許保有者を採用していくものと考えられるが、現職教員への対応はどうか。専門性確保のためには免許状は必須条件であり、教員にとってもモチベーションにつながる。現職教員への研修への参加等積極的に働きかけてほしい。</p> <p>②個別指導計画の作成率(99.2%)</p> <p>量は達成しているが、質はどうか。個別指導計画は特別支援教育のスタート。指導の方向性、評価の視点、評価に対する説明責任、指導による子どもの変容。これらを踏まえた個に応じた計画であるべきである。</p> <p>③障がいに対する理解・啓発の取組み</p> <p>一般校における、児童生徒・教職員等に対する理解・啓発の取組みが重要だ。身体障がいは疑似験等が可能で理解も進んできたが、知的障がい・発達障がいは疑似体験が難しく理解啓発がなかなか進まない状況。育成会では知的障がいを理解してもらうためのワークショップを開催している。一般校の児童生徒、教職員に対する体験機会として活用してもらえればよい。</p> <p>④合理的配慮について</p> <p>知的障がい者はコミュニケーションに課題がある。分かりやすい情報提供など工夫が必要。情報のバリアフリー化や心理的バリアの解消の視点が必要である。</p> <p>⑤知的障がい児の進路について</p> <p>知的障がい児は18歳以降の進路選択が狭まる。医療・福祉・労働が中心であり、進学という選択は少ない。保護者からは進学(学校)に対するニーズがある。教育の中でキャリアアップできるような(盲(聾)学校における)専攻科のようなものがないか。</p>

黒田委員

P11 【8 変化に対応する実践的な力の育成】 関係

- ・私は、山形に移住してきたので、山形のよさを表現しやすい立場にあり、山形には、「データに表れない素晴らしさがある」と考えている。
11 ページに「英検準1級 以上の英語力のある英語担当教員の割合」という指標が示されているが、私のところにも、中学校の英語の先生などから「準1級がなかなかとれないのでどうしたらいいでしょう」という質問もよくいただく。確かに、準1級を取得するのは難しいしここに示された数値としては未達成となっているが、では1級を持っていけばいい先生かというとは必ずしもそうでない場合があるし、2級でも優れた先生方はたくさんいる。そのような数値よりも、先生方にとって何より大切なのは、「子どもたちが憧れを感じる存在であるか」ということである。このため、先生方が子どもたちにとって、憧れを感じる存在になれるチャンスを多くつくってほしい。たとえ英検は2級であっても素晴らしい英会話力を持っている先生方はたくさんいて、その先生が英会話をしている姿を子どもたちが見て「かっこいい」と感じて、その子どもたちに先生が、「英会話の力がどのようなことにつながっていくか」という視点で話をしてくだされれば、子どもたちが英語を学ぶモチベーションが高まると考えている。英会話に限らず、先生方がそれぞれの専門性を発揮し、子どもたちが憧れを感じられる場面を多くつくってほしいと願う。
- ・社会の変化の速度が増してきて、「昔はこうだった、今までこうやってきた」ということが通用しなくなってきている。コンプライアンスということも、単に法令を遵守していればいいのかというとは必ずしもそれだけではなく、常に、社会からどのように見られどのように評価されているかということを考える必要がある。その時に重要となるのが、「基本的な人権を尊重しているか」ということである。年齢や性別、国籍などを超えて、それぞれの基本的な人権を尊重するということを常に考え行動し、子どもたちにも伝えていく必要がある。
- ・米沢市で、大学生や留学生と子どもたちで、ハロウィンのパンプキンと一緒に作ったりしながら2日間英語漬けのイングリッシュキャンプを実施した。英語教育には、さまざまなやり方があり、それぞれの地域らしさを活かした活動の可能性があると考えている。
- ・小・中・高校・大学の先生方には、それぞれの学校種に応じたよさや専門性があり、交流の機会を持つことで、子どもたちの教育の可能性がさらに広がると思うので、ぜひその機会を広げてほしい。

渋谷委員

P18 【15 山形の宝の保存活用・継承】 関係

- ・今回の「未来に伝える山形の宝」登録制度による新規登録件数を4件のうち、3件は民間団体で、全登録件数 26 件のうち、半数の 13 団体が民間団体ということになった。地域住民が自分たちの地元に誇りを持って活動してきており、良いことだと考える。
- ・文化財については、保全が第一といわれてきた。文化財保護法が改正され、文化財の観光活用が積極的に行われるのはよいが保全がないがしろにならないように、文化財の保全と活用のバランスをとることが必要。県として保全に率先して取り組んでほしい。

<p>高見委員</p> <p>【回答】</p> <p>【回答】</p>	<p>P5【1「いのちの教育の推進」】関係</p> <p>「自尊感情を育てる」という観点で、学校ではどのように取り組んでいるか。</p> <p>(澁江教育次長)</p> <p>学校においては、道徳も含めた教科学習はもとより、児童会・生徒会活動等でも、子どもたち自身で課題を見つけ、解決する方策を考え、実行していく過程を通して、この学級で、この学校で学んでよかったという実感が持てるような取り組みを行っている。</p> <p>P7【4「教育の原点である家庭教育、幼児教育の推進」】関係</p> <p>・母親同士の話の中で、幼稚園ではできていたことが、小学校に入るとできなくなるということが時々出てくる。例えば、鍵盤ハーモニカで、幼稚園ではかなり演奏できていたのに、小学校に入ったら一律に鍵盤にシールを貼って、「ド・レ・ミ…」から始められていて、幼稚園での経験が小学校でうまく活かされていないなどの場面が見られる。幼稚園や保育園での子どもたちの姿を、小学校の先生方に見ていただくなど、幼保小の連携について、さらに効果的に進められるようにしていただきたい。</p> <p>(澁江教育次長)</p> <p>幼保小連携の取組みとしては、小学校の教員が幼稚園や保育園に出向いたり、幼稚園や保育園の先生方から小学校に来ていただいて、子どもたちの生活の様子や指導上留意すべきことなどを細やかに伝えていただいたりするなど、各学校で連絡会議等を実施している。一方で、子どもたちの「学びの連続性」という観点では、ご指摘のとおり改善すべき点が少なくないと捉えている。本県では「幼保小連携スタートプログラム」を作成して研修等で活用しているが、今後も「できることを効果的につなげていく」という視点で、さらに改善していきたいと考えている。</p> <p>P7【5「豊かな心の育成」】関係</p> <p>・学校・家庭・地域が連携して、子どもたちが野外で遊んだり、自然体験を多く積み重ねたりすることができるような方策を考えていただきたい。</p>
<p>中山委員</p>	<p>・6教振の後期計画に向け中間総括として過去3年間の所感について。</p> <p>29年度事業は、達成・未達成とも3ヵ年で最高であり分極化が進んでいる。また、達成・おおむね達成を合計すると約70%に及び、成果が表れていると考える。</p> <p>自己肯定感やいじめ解消率などは、年々実績が上がっている一方、確かな学力関係では達成(となった項目)は13～14%にとどまり、学力に課題があると考えられる。</p> <p>評価目標のあり方についてであるが、各年度の目標をどう設定しているのか。</p>

難関大の合格者数は実態と目標水準に大きな乖離がある。体力テストは「項目数」から「項目数の割合」に目標が変更されている。英検準1級については、27～32年度まで単年度目標が増減している。

【回答】

(奥山総務課長)

各年度の数値目標については6教振の数値目標を参考とし、各年度で求められる達成水準を設定している。

(柿崎教育次長)

難関大学や医学部については大学の定員が減っている等の厳しい状況であるが、努力してまいりたい。

高等学校入学者選考における採点ミスに伴い、記述式の問題を減らすと報道があった。一方、大学入試改革においては記述式を増やす方向である。小中学校で取組む探究型学習に大きな影響を与えないか。大学入試改革に逆行するものでないか。

【回答】

(柿崎教育次長)

大学入試のことも念頭に置きながら、採点ミスを減らすために記述式問題の削減を行った。再発防止に向けた第三者委員会の中でも、思考力・判断力を問うには必ずしも記述式でなければならないという訳ではないという分析があったことから、受験生への影響が大きくなりよう今後とも努めていく。

三浦委員

- ・全体として、県の取組みはよい状況にあるといえる。
- ・その中で委員の指摘にあったように、数値的に達成した項目について質的な面をどう捉えていくかが重要な視点となる。
- ・現在、評価項目については、個別の項目毎に評価をしているが、関連する項目(例えば、家庭教育と学校教育、アスリートの競技力と人間力の育成など)でどう連携していくか。そういう視点で評価をしていくことも検討してはどうか。
- ・社会の状況は刻々と変わっている。6教振の後期プラン策定に向けて、現在の6教振の内容について、新たな視点を含め検討を進めていくべきではないか。例えば、記述式問題の増加等大学入試改革と探究型学習のつながりを見て施策に活かしたり、といったことも考えられる。
- ・各委員の意見を今後の新たな施策に活かしていただければと思う。